山本嘉孝著
『詩文と経世――幕府儒臣の十八世紀』
（名古屋大学出版会・二〇二一年）

高山　大毅

一、第一部と本書の詩文解釈について

近世日本漢文学研究と近世日本思想史研究は、「学際」的といった言葉が今さらのように思われるほどに、古くから深い関係にある。中村幸彦の文芸思潮研究は、津田左右吉や丸山眞男の議論を意識したものであり、日野龍夫の業績が思想史・文学の二つの領域に跨るものであることはいうまでもない。本書は、このような文学研究・思想史研究の融合の伝統に連なりながら、室鳩巣などの江戸中期の朱子学者を主要な対象とし、彼らの文事と学問の関係に新たな光を当てるものである。

本書の第一部「木門の儒臣の詩文と擬古」は、室鳩巣の「擬古」的な詩文を詳細に読み解くことで、鳩巣の諸作にこめられた「経世」「時事」に対する彼の思考や感懐を明らかにする。分析対象となるのは、鳩巣の漢文書簡（第一章）、和陶詩（第二章）、辺塞詩（第三章）、中秋詩（第四章）である。「擬古」的な詩文は、模擬の対象の詩文の表現をいかに踏襲、あるいは改変したのか――といった技巧面への関心から研究が行われることが多い。それに対して本書は、「擬古」的な作品の「寓意」に注目することに特色がある。

漢詩文において、古人や彼らの詩文の表現に仮託して自己の心情を述べることは常套手段であり、「寓意」への着目は正当なものである。また、本書のように詩文の表現の一字一句の来歴に遡り、作品を検討するやり方は文学研究の正攻法といえる。中村幸彦の「近世的表現」の研究以来（中村幸彦『中村幸彦著述集第二巻　近世的表現』中央公論社、一九八二年）、表現への密着は近世文学研究の得手とする所である。表現と「経世」「時事」をめぐる思想との連関を探るという本書の視点は、文学研究と思想史研究の望ましい接続の方途を示している。

詩文に寓された真意を探る際には、牽強の説に陥ることを避けるために、表現の緻密な読解が肝要になる。以下、瑣末とも見える漢詩の解釈の問題にあえて拘泥したい。細かな表現の理解が本書第一部の議論に深く関わっていると考えるからである。

本書第二章は、鳩巣が陶淵明の詩に次韻した諸作の中から「擬古五首」を取り上げている。「擬古五首」第五は「商山饒霊芝、仙薬近可採、何為信方士、坐使歳月改（商山 霊芝 饒（ゆた）かなり、仙薬 近くして採る可し。何為れぞ方士を信じ、坐（そぞ）ろに歳月をして改めしめん）」と始まる（九五頁）。これは、商山四皓（秦代に商山に潜み、漢の高祖の跡継ぎ問題の際に現れた四人の隠者）と東海中に仙薬を求めた徐福の故事を踏まえたものであろう。商山四皓

の作とされる「紫芝歌」には、商山に生える霊芝が詠じられている。よって、本詩の冒頭は、近くの商山に仙薬となる霊芝があるのに、徐福のような方士の言を信じて、遠い東海のかなたに仙薬を求めてもいたずらに歳月が流れるばかりである――といった意味である。「寓意」についていえば、身近な人材に目を向けず、逸材をやみくもに探しても意味がない――と君主を諷するものではなかろうか。しかし、不思議なことに、本書は商山四皓と徐福の故事に触れない。

その一方で、本書は「悠悠薬不至、衰老欲何待（悠悠として薬至らず、衰老 何をか待たんと欲する）」という句と、杜甫「贈鄭十八賁」の「卑飛欲何待、捷径応未忍（卑く飛んで何をか待たんと欲する、捷径応に未だ忍びざるべし）」という句の類似から、この詩を杜甫の詩に結び付ける。その上で、「衰老欲何待」の句は、「杜甫の詩を踏まえると、儒者として早く大業を成し遂げたいという「願ひ」の裏返しとしても解釈できる」と本書は説く（九七頁）。しかし、「方士」の言を信じて仙薬を待ち焦がれる「衰老」の人物（つまり始皇帝）に、鳩巣が自己をなぞらえるというのは、本書が明らかにしている彼の道徳重視の詩風からいっても不自然である。

第四章は、白石と鳩巣の贈答詩を、李白や屈原への言及に注目しながら検討している。この章で分析対象となっている鳩巣の「観白石中秋詩有感五首」第四首には「目迷文彩梅花賦、誰識李唐骨鯁臣（目は文彩に迷ふ梅花の賦、誰か識らん李唐骨鯁の臣）」とある（一四〇頁）。本書は「骨鯁臣」という語と韓愈「争臣論」の「骨鯁之臣（骨鯁の臣）」の語の一致から、鳩巣は「白石を陽城に比し」たとし、「争臣論」が「漢詩制作にも用いられたことは、唐宋古文と盛唐詩受容の交差が見られるという点において、注目に値する」と述べる（一四三頁）。しかし、「争臣論」で韓愈は陽城を痛烈に非難しており、不審である。この鳩巣の詩句は、唐代の名相である宋璟が「鉄腸石心」と称される剛直な人柄でありながら、「梅花賦」のような艶麗な作品をものした――という故事（皮日休「桃花賦序」）を踏まえたものであろう。鳩巣は白石を宋璟に比擬し、白石は次韻詩の中で家宣在世時の自己を魏徴になぞらえる。これらの賢臣に関わる表現は、当時、白石が近世日本の儒学的教養人でありながら、例外的に政治に深く参与したために可能になったものである。李白や屈原への言及よりも、この種の典拠表現にこそ、この時期の木門の詩の特色を見るべきではなかろうか。

右の二例を取り上げたのは、その失考を指摘するためというより、本書の「擬古」的な詩文の解釈手法に対して書評者が抱く違和感を具体的に示したかったためである。「擬古」的な詩文の制作に当たっては、古い典籍の表現を切り張りして用いることは多い。その際、単に表現を借用してるだけで、出典の作品の内容を自己の作品に反映させない場合も少なくない（たとえば、詩語集から言葉を拾って作詩をする際に、それぞれの語の出典となっている詩の内容を一々考えるだろうか）。「擬古五首」第

五首の例でいえば、「欲何待」という語を鳩巣が用いた際には、杜甫の詩が彼の念頭を過った可能性はある。しかし、単に自作の文脈と韻字とに合った語彙を採用しただけで、杜甫の詩の内容と自己の詩の内容を連関させる意識はなかったのではないか。書評者の考えでは、当該の鳩巣の詩において、商山四皓・徐福の故事はそれ抜きでは解釈ができないという点でいわば重い出典であるのに対し、杜甫の詩は語句を借りただけの可能性がある軽い出典である。本書の詩文の解釈は全般的に出典を丁寧に挙げており、高い価値を有している。しかし、出典の軽重の区別をつけずに、軽い出典の内容を作品解釈に制約なく取り入れる傾向があり、しばしば放恣な「寓意」の解釈に接近しているように思われる。

二、第二部・第三部について

第二部「武家の言語空間と幕府儒臣」では、室鳩巣・中村蘭林・柴野栗山を例に取り、「幕府儒臣」が武家に儒学を浸透させるために用いた表現媒体の問題が議論されている。鳩巣は漢文の教養に乏しい武士にも分かりやすい候文で意見書を執筆し（第五章）、鳩巣の弟子の中村蘭林は「古書・古文辞」の学習を説きながらも（第六章）、「冷泉派幕臣歌壇」の発展を踏まえて和歌を教戒の手段として活用した（第七章）。このように、「幕府儒臣」には漢詩文以外の表現媒体を用いた武士教育の構想が見られた。しかし、柴野栗山は学問吟味において漢文制作の能力を問う試験を武士に課すことにし、作文習得を奨励した。これは、尾藤二洲らの作文重視の議論の影響を栗山が受けたことに直接の原因があり、さらにその背景には漢詩文の制作が広く学ばれるようになった「在野」の学問状況があった。栗山や頼春水は、漢詩文に秀でた朱子学者の先蹤として鳩巣を高く評価した（第八章）。

以上のような本書第二部の議論は、同時代の中国・朝鮮と比べて、統治者が漢詩文に疎いがゆえに発生した「儒臣」の困難を浮かび上がらせている。本書の「結語」では、木門の儒者と闇斎学派との関わりの解明が今後の課題として提示されている（三六七～三六八頁）。木門に限らず、漢詩文と朱子学者の関係を考える上で、欠かせない論点であろう。寛政正学派の儒者には、闇斎学派のような狭隘な学風になってはならない――といった言述がしばしば見られる（古賀精里「与某侯」、中井竹山「答松藩谷某」）。漢詩文に堪能であることは、闇斎学派外の朱子学者が闇斎学派との差異化を図る上でも重要であったと考えられる。闇斎学派の問題を取り込むことで、本書第二部の議論は今後さらに発展していくに違いない。

第三部「諸芸の流行と経世家」は、「幕府儒臣」に焦点を当てていた第一部・第二部と異なり、「在野」の文人・学者の動向を主に分析する。初めに、「儒臣」である祇園南海が謫居時代の経験を踏まえて竹枝詞（民謡を模倣した漢詩）を制作したことを取り上げ、「「民間」を称揚する姿勢」の先駆者に南海を

位置付ける（第九章）。続いて、大田錦城の実兄であり、袁宏道の詩文・「挿花」（いけばな）の受容者であった樫田北岸の「表層的技巧の超越」を志向する議論を検討し（第十章）、さらに山本北山の「技術向上」を重視する詩文論を考察する（第十一章）。最後に、「表層的技巧の超越」と「技術向上」の重視の双方の流れが組み合わさり、林鶴梁の「神気」を重視する作文論が出現したことを明らかにする（第十二章）。

従来の研究では、古文辞派から性霊派に到る流れは、「自我」や「個性」の解放の進展であると理解されてきた。これに対して、本書は「技術」の問題に着目して議論を展開する。これまで山本北山の文学論は「真情」の表出を高く評価するため、「自我」や「個性」の解放につながるものであると見なされてきた。しかし、北山の著作は、字法・句法の誤りの指摘といった詩文の細かな技術論に多くの紙数を費やしている。本書の分析は、北山の「技術」重視の側面に適切に光を当てており、優れている。北山のような、自己の学問の精密さによって徂徠学派の疎漏を指弾する――というやり方は、他の学者の著作にも見られるものである。たとえば、中井竹山『詩律兆』をその一つに挙げることができよう。

三、本書の文学史理解と「朝野」概念について

本書が全体として示す近世日本漢文学史の図式は次のようなものである（三五四頁）。

十七世紀：平安朝の文物の思慕と模倣――《林家》
十八世紀前半：古代中国（漢代以前・六朝・唐）の文物の思慕と模倣――《木門・徂徠門下》
十八世紀後半：技芸としての流行、模倣の硬直化、及びそれへの反動――《在野主導》

本書はさらにこの図式に「朝野」の概念を加えて、「六朝・盛唐詩を模倣する擬古的作詩と唐宋古文を手本とした作文は「朝」で発生し、後から「野」に流れて行ったが、特に清新性霊詩を拠り所にする反擬古・反古文辞の作詩は、「野」で発生し「朝」に流れて行った」と整理する（三六三頁）。「朝野」の枠組の中で、木門は「朝」寄りに、徂徠学派は「野」寄りに位置付けられている。

この「朝野」という分析概念は、それぞれの儒者の地位（「幕府儒官」、「民間」の儒者・文人など）と彼らの学問・詩文の関係を精査するための装置であろう。研究史の中に位置付ければ、この「朝野」概念は、儒学的教養人の存在形態を比較検討した渡辺浩の研究（『東アジアの王権と思想』東京大学出版会、一九九七年）に先ずは連なっている。さらに、学者・文人の伝記や交遊圏を緻密に考察する近年の近世文学研究の潮流を受けたものでもある。「朝野」概念は、思想史研究と文学研究の果敢な融合の試みであるといえる。

ただし、「朝野」は二文字の簡潔な語彙であるという長所はあるものの、本書が示唆している問題を逆に見えにくくしてい

るように思われる。本書は、「朝」とは「為政者（将軍・藩主）の文化圏」のことであり、「野」とは「民間の文化圏」であると説明する（三六一頁）。徳川公儀と大名家が一枚岩の文化圏を構成していたとは考えにくく、複数の「朝」が並存していた状態であると見るのが自然であろう（本書では禁裏も「朝」とされており〈三六二頁〉、禁裏を含めて考えれば、単一の「朝」というのは一層成り立ちにくい）。ところが、「朝野」の二項対立を採用すると、「朝」と「朝」――公儀・大名家間、諸大名家間など――の関係が視野に入りにくくなってしまう。室鳩巣は、旧主である前田家に仕える門人に公儀の内情を書簡で伝えており、いわば「朝」と「朝」をつなぐ役割を担っていた。「朝野」という概念は、近世中国や近世朝鮮の政治体制にはまだしも適合的かもしれない。しかし、近世日本の政治体制と「朝野」とは相性が悪く、この概念では当時の儒者の立場や活動をうまく捉えられないのではなかろうか。

本書は、「〔柳沢吉保隠居と―引用者注〕同年、徂徠も儒臣を辞めて町儒者となった」（一三一頁）、「民間の儒者」（一七九頁）といったように、徂徠を「在野」の儒者に位置付け、「幕府儒官」の鳩巣らと対比する。しかし、徂徠は吉保の恩遇によって「町宅」居住を許されてはいたが、没するまで柳沢家の御儒者であった（本書も公儀の「隠密御用」を務めた享保期の徂徠は「自身は「朝」にも参与する立場にあった」という〈三九三頁〉）。さらにいえば、徂徠の弟の荻生北渓は公儀の寄合儒者であり、徂徠の弟子で好文の大名であった本多忠統は、若年寄になっている。木門は「儒官」志向、徂徠学派は「在野」志向といった対比の構成は困難である。これらは事実誤認というより、「朝野」の図式の硬直性ゆえに行論上発生したひずみであるように思われる。

「朝野」概念の背後にあった本書の狙いは、儒者・文人の存在形態に対する認識の解像度を一層上げることで、彼らの学問・詩文の理解を更新することであったと思われる。ひとえに「御儒者」といっても、儒者ごとに従事する職務に差異があり、その差異が彼らの学問や詩文の方向性に影響を与えることはあったに違いない。実際、本書にはかかる事例が紹介されており（特に第二部）、また本書が重視する林家の王朝時代への「思慕」も、『本朝通鑑』の編纂と関係していよう。政治に参与できない「御儒者」たち――という理解から一歩踏み出し、彼らが担っていた具体的な職務と彼らの学問・詩文の関係を明らかにすることが必要なのであろう。本書が切り拓いたこのような研究の方向性は、「朝野」や「儒官」といった関鍵語（キーワード）よりも長い射程を有していると思われてならない。

（東京大学准教授）